されてきた尾瀬保護専門委員の両著者が，尾瀬の自然を多方面から紹介し，その保護について詳しく述べたのが本書である．内容は，尾瀬のなり立ち，尾瀬の自然，尾瀬の保護，登山（観察）コースの4章から成り，巻頭に尾瀬のすばらしい景観と代表的植物，荒らされた植生の様子などのカラー写真26個があり，本文中にも多数の写真や説明図があってわかり易い．最初の尾瀬地域の地形と地質，次に尾瀬ヶ原の湿原がどうしてできたのかについての二つの考え方などの説明がある．次章の自然では，気象条件，植物，動物が述べてあるが，植物に関することが最も詳しい．低層湿原・中間湿原・高層湿原，ブルト（小凸地），ケルミ（帯状小凸地），シュレンケ（帯状小凹地），池塘・浮島・竜宮，山地湿原など湿原の特殊な様子を解説し，尾瀬ヶ原が将来どのように変化するだろうかの予想に及んでいる．次に日本海型気候域の多雪地帯にある本地域の植生を，各湿原表面の植生，水生植物，水辺草原など，次いで山地の森林，高山荒原のそれぞれについて詳しく説明している．尾瀬の植物相は日本海要素と北方系要素で成り立っていて，シダ植物以上の高等植物は113科902種類，その中に尾瀬特産および尾瀬で最初に発見された種類が42ある．特産種と水生植物19の説明に続いて，上記902種類の目録と花ごよみ（産地ごとに時季・花色・生育地入り）がある．

本書の今一つの力点「尾瀬の保護」には多くの頁が割かれている．最初に尾瀬の歴史，そして長蔵小屋と電力問題，水利権と東京の水かめなど，開発と保護の歴史が述べられ，次いで自然破壊と保護対策が論じられている．入山者が増えると共に，踏みつけによって湿地の植物が枯れ，泥炭が粉になって流出し，至仏登山道などは道沿いの植物が踏み荒らされて裸地になるなど破壊が各所に起こっている．被害場所への立入禁止などの保護をしても回復が遅いので，著者らは適当な植物の移植や種播きを行なって回復を計り成功している．又尾瀬へ入るための車道さらにはスーパー林道の建設による破壊がひどく，ゴミや生活排水の問題も大きい．その上山小屋周辺や道沿いには，平地の植物が登って来たものや帰化植物，園芸植物が野生化したものなどが多くなって来ている．最後の章は各入口からの登山コースガイドで，観察のポイントや所要時間，場所々々の植物の案内が詳しい．尾瀬を知るのに大変工合のよい書物である．

（伊藤　洋）

中村武久：**バナナ学入門**（丸善ライブラリー021）148pp. 1991. 丸善，東京. ￥580.

マングローブや熱帯シダなど熱帯地方の植物の分類・生態・栽培に詳しい著者（東京農業大学教授）が，バナナとその仲間の植物について，植物学的解説や人間との関係などを述べた読物である．東南アジアなどには野生のバナナが生えているが，その果実には種子がいっぱい詰まっていて，食べる部分がほとんどない．しかし種子の少ないものや，稀には単為結果によって種子なしになった株も発見される．また何らかの刺激で染色体が2倍になって4倍体の株ができ，これが元の2倍体の株との交配によって3倍体の種子なしバナナが生まれることも考えられる．シモンズらの研究によると，栽培バナナの原産地はマライ半島あたりで，*Musa acuminata* と *Musa balbisiana* の2種が起原であるという．前者をA，後者をBと略記すると，Aの同質2倍体AA，同じく3倍体AAA，雑種3倍体AABとABB，雑種4倍体ABBBが見られ，それぞれに当たる多数の品種がマライ・インドネシア方面，タイ，インドに分布している．なお東南アジアでは，Aはほぼ全域に分布しているが，Bはマライ半島やインドネシアを欠いてニューギニアからインドシナ北部，インドまで分布しているので，ABの交雑3倍体品種はフィリピンやインドでできたと考えられている．Bの入った品種では熟した果実に糖に成りきらないデンプンが残るので，料理に用いられる．フィリピンでできた料理用バナナはインドシナ・インド・東アフリカへ，東南方へは南太平洋の島を経てニューギニアへ，さらにメラネシア・ポリネシアへと伝わって行った．さらに中南米への分布，又別の経路による伝播などの考え方もあるが，栽培植物の伝播と民族の移動とが連動しているようで複雑である．

上記のAB 2種のほかに，ニューギニア・メラネシア・ポリネシア・ミクロネシアなどオセアニ

ア地域にはフェイバナナ *Musa fehi* があり，別の栽培品種ができている．これは普通のバナナとは別の節 Sect. Australimusa に属し，染色体の基本数10，果房は直立する（普通のバナナ Sect. Eumusa は基本数11，果房は垂れる）．

日本には小笠原と沖縄にシマバナナがあり，果実は小形で黄熟，皮が薄い．バショウは本州北部まで栽培され，バナナ属中最も耐寒性が強い．沖縄にはイトバショウがあり，茎（葉柄の部分）から繊維を取って芭蕉布が作られる．フィリピンのアバカも同様繊維が取れるが，この方は強靭で耐湿性の強いマニラアサで，ロープ・漁網・衣類・紙などの原料になる．その他バナナ属の種類には解熱など薬用になるもの，鑑賞用として植えられるものなどがあるが，何と言っても食物としてのバナナ産業は大いに有望で，21世紀の食料問題はバナナなしには解決できないだろうと結んでいる．

（伊藤　洋）

緑区・自然を守る会：**カタクリの咲く谷戸に**（横浜・新治の自然誌）80pp. 1991. 文一総合出版，〒162 東京都新宿区西五軒町 13－10，￥2,000（税込）．

横浜市西北部の緑区は，北の川崎市と西の町田市に接している．一方南は多摩丘陵の末端に近く，至る所に谷戸（やと）と呼ばれる小さい谷があり，豊富な湧き水によって緑あふれる雑木林や水田ができているので，植物の種類が多く，昆虫や鳥もたくさん住んでいる．ところがここにも開発の手が延び，自然が破壊されて緑が減ってきた．それを案じて10年ほど前に当区新治町に発足した「自然を守る会」の方々が，観察会を行ない写真を撮り生物を調査して記録した結果をまとめたのがこの本だという．A 3 判を短かくした形の横開きで，2 頁にわたる大型から小型のまで大小合計100余の写真は何れも色美しく生々と自然を捉えていて，どこを開いても楽しい．写真の約 6 割は植物の生態や大写し，残りが鳥や昆虫，そして興味深い解説が付いている．配列は春夏秋冬の順で，3 月第 1 週「ニワトコの週」から始まって第 2 週「カントウタンポポの週」次いでイノデ・カタクリ・アケビ…と続き，翌年 2 月第 4 週「ウグイスの週」で終っている．植物の見出し21，昆虫14，鳥 8，その他5となっている．巻末に15頁の資料編がある．「新治，路傍の花暦1990」は230種の植物の10日毎の花の咲き工合を 3 段階で表示した記録の表で，「新治・三保の植物雑記」は雑木林・シダ・春植物・ハンノキ林・失われゆく草原の植物・固有種・山地性種の遺存についての説明，次に蝶・トンボ・野鳥に関する記事があり，最後にこの 9 年間に緑区の自然環境が開発によってどれだけ失われたか，いつか・どこかで・たれかが何とかしなければ，と結んでいる．

（伊藤　洋）

阪井與志雄：**マリモの科学**　202pp. 1991. 北海道大学図書刊行会，札幌．￥1,854.

マリモは，名まえは人々に広く知られているが，どのような生物ですか？生態は？生殖方法は？などと訊ねられてすぐさま答えられる人は多くない．湖底に生育する，分布域が限られる，特別天然記念物であることなどもあって，調査研究のグループや研究者が限られる傾向にあり，成果の報告も学会誌や専門誌などよりむしろ文化財保護関係や自治体の刊行物などに多く，従ってマリモについて知見を総合的に蒐集するには相当の努力が必要である．著者の阪井興志雄氏は元北海道大学海藻研究施設長で，マリモが分類上所属する緑藻シオグサ属（*Cladophora*）の分類を専門とし，北大理学部の助手時代より山田幸男教授に協力してマリモの調査研究に携わり，爾来マリモについて知見を深め，その保護にも深心を持ってこられた方である．マリモについて現在どこまで知り得たか，研究者はこれから何を解き明かそうとしているかをまとめたものが本書であるという．13章から成り，マリモ発見の歴史，分布，集団の構造，藻体の構造，生殖及び生長の様式，球化，生理及び分類等を扱い，最後の章で阿寒湖のマリモ被害と保護対策を述べている．引用文献は88に及ぶ．芝生のように拡がっているものが多いこと，栄養繁殖のほかに 2 本の鞭毛をもつ遊走細胞をつくること，水深 1 m，波長 3 m，波高30㎝のとき直径 5 の球体は6.2㎝の幅で動き，1 時間に2,980回転することなど，新しい知見に遭遇する読者も多いと思う．人工球化についての紹介もある．残念なこと